

【特集】

「上書き」される フクシマの 記憶

ひとたび原発事故が起きれば50年、100年たつても原状回復はできない。東京電力福島第一原発事故から9年。福島県民の記憶は薄れ、放射線教育は正念場に立つ。また国は「風評被害」を払拭すべく、事故直後から広告代理店最大手の電通に広報事業を委託していたことが情報公開請求で判明。「記憶の上書き」の実態を報告する。

大看板「原子力郷土の発展豊かな未来」があった場所。元双葉町役場近く。(撮影/豊田直巳)

風化と復興のはざままで

放射線教育にみる フクシマの現実

平舘英明

新型コロナウイルス感染症の対策として、安倍晋三首相が唐突に要請した学校の一斉休校！。

対応に追われた福島市内の学童保育では、指導員らが「また、見えない敵と戦うことになったね」と言葉を変えていた。「見えない敵」と回想したのは、東京電力福島第一原発事故で市内に降り注いだ放射性物質のことである。

風化する原発事故

この学童保育では毎年、東日本大震災（2011年）が起きた日に合わせて黙祷する。指導員の山崎郁子さん（仮名）が小学1、2年生の児童に「今日は何の日？」と声をかけると「東日本の日だよね」「津波でいっぱい人が死んだ」との答えが返ってきた。だが、直後に起きた福島第一原発事故に触れた児童はいなかった。長年、子どもたちを見守ってきた山崎さんは「（児童たちの）家庭では原発

事故の話はしていない」と話す。

この学童保育の周辺は市内でも放射線量がやや高く、ホットスポットもあった。事故後、児童らは外で遊ばず、室内でおとなしく過ごした。保護者らは顔を合わせるたびに放射線の不安を口にした。

あれから9年。除染の効果もあり、放射線量は下がった。公園では子どもが遊ぶ姿が日常の光景になった。周辺には住宅が建ち、学童保育を見学する親子も増えた。山崎さんが「地域の空気が変わった」と感じたのは2、3年前だ。山崎さんは見学に訪れる保護者に、以前の放射線量を伝えてきたが、気にする様子は見られない。あるとき「だって（放射線を気にしていたら）住めないじゃないですか」とあっさり言われ、「原発事故は過去のことなのか」と複雑な気持ちになった。

原発事故の風化はそれだけではない。放射線から身を守るための